

世間の人民、父子・兄弟・夫婦・室家・中外の親属、当に相敬愛して相憎嫉することなかるべし。有無相通じて貪惜を得ることなかれ。言色常に和して相違戻ることなかれ。

(『仏説無量寿経卷下』真宗聖典五九頁)

世間の人々よ、父子・兄弟・夫婦・家族・父方母方の親族の間柄にあるものは、互いに敬愛しあい憎み妬むことがあってはならない。持てるものは持たないものに融通し分かち合って、貪り執着してはならない。言葉と表情は和らげ、逆らい背き合うことがあってはならない。

(意識)

## 如来、我となりて 我をすくいたもう

函館別院輪番

北第3組 教照寺住職

照山 昌征

Text by Masayuki Teruyama

この文は、『仏説無量寿経』卷下の「三毒・五悪段」において、念仏者に改めて三毒煩惱の過の激しさをさとし、これを誡める釈尊の大慈悲心が説かれている場所です。

それは、名号の縁によって阿弥陀の願心にふれ念仏申す身となったとはいえ、宗祖が「欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」と教えられる通りの凡夫の身であります。ひとたび欲心にかられ不満の思いを抱くと、たちまちにして怒り腹立ちの心が駆け巡り、暴風駛雨のごとく膨れ上がり激しさを増し、遂には善悪の見境をも見失った凄惨な地獄の業をさらけ出してしまうのが人の世の常であります。しかも、親子・兄弟・夫婦・親族という極めて身近な間柄においてさえ、煩惱の<sup>わざわい</sup>過は容赦なく悲惨な結果をもたらします。

地獄の「地」は最低の境界を表し、「獄」は極めて狭い場所を指しますが、それは外の客観的事物の状況を言うのではなく、一つの物や事柄にとらわれると、広く周りの状況を見る心の余裕が失われ、一局に凝り固まってしまう人間の精神的傾向性を表しているのでありましょう。またこの獄の字の成り立ちをよく

見ますと、「犸（けもの 偏）」はもともと「犬」の形状から来ていると辞書にありますから、言葉を挟んで二匹の犬が向かい合っている。つまり、それぞれがそれぞれの勝手な主張を述べ、「我こそ正義なり」と言い争っている構図が見えてきます。そこには、言葉はあっても全く相手と通じ合わない愚かな状況が示されておりま

す。このような争いが起こった場合、往々にして一方が腕力・権力・勢いをもって相手を抑え込み、問題の解決を図ろうとしますが、これでは本当の解決には至りません。かえって問題をこじらせ深めるばかりでありますし、相手には被害者意識を持たせ、憎悪の思いを引き起こさせ、争いの火種を残すばかりであります。本当の解決は、双方が自身の非に目覚めて深く謝る以外にはありません。

このことを思うとき、私には忘れることのできない老夫婦の姿が浮かびます。ご夫婦共にお寺の世話方を永く務めて下さった、新井田萬寿男さん、サダさんご夫妻です。夫の萬寿男さんは、代々受け継いだ漁業を営んでおりましたが、家業の傍ら地域に起こる様々問題の解決に尽力された人でした。特に誰もが嫌がって手を出さないような問題でも、「わたしのようなものでもよければ」といって、まとめ役を引き受け忙しい日々を送っておりました。例えば、大戦後地域に続出した結核患者の家庭を援け、病気の予防を住民に呼びかけるために設立された「結核予防世話人会」の会長や、地域の火葬場建設にかかる期成会の会長など、他の人が自身の罹患や迷信を恐れて引き受け手のなかった役目をも背負われました。また、経年疲労の激しかったお寺の本堂庫裡の新築事業の際にも、募金活動になかなか腰を上げようとしなかった他の役員を叱咤激励し、既に80歳を越えて病弱がちの我が身をも顧みず、先頭に立って各家々を回って下さり事業を完遂させた功労者でもありました。

しかし、これが一方のサダさんにとってみれば、大変な負担となったようです。先ず子供たちの養育や、舅・姑の世話など、家庭内の万端について「お前やっておけ」の一言で全て任せっきりで相談にならず、一人悪戦苦闘を強いられたこと。一人いた小姑が時々起こす粗相の濡れ衣をいつも着せられ、一方的に姑から叱られていた時にも、夫から何の助けももらえなかった悔しさは一生忘れることができないとこぼしていました。

ところが、萬寿男さんが80の半ばを超えて、いよいよ衰弱が進み病床に伏すようになったある日、それまでも看病するサダさんにわがまを言って怒鳴り散らしていた萬寿男さんでしたが、急に言葉を改め「サダ、ちょっとここにきて座れ」と言われました。また小言を言うのかと訝りつつ枕元に座ると、病床に起き上がり床に両手をついて言うには、「男という者は、わがままで頑固なものだから、一々のことについて女房に謝るなんてことはしないものだ。しかし、男である限り一度は女房に謝らなければならない時がある。今その時が来た」と言って、結婚以来の生活の中で起こった様々な場面について振り返えりつつ、「どれもこれも俺のわがままと不甲斐なさがなさしめたことであり、すべて俺が悪かった。すまなかった。それにもかかわらずよく辛抱し俺を支えてくれた。おかげで今日まで何とかやってこれた、有難う」と言い、深く頭を下げて謝られました。

始めはどれもサダさんが悔しく腹立たしく思っていたことばかりであり、今頃そんなことに気が付いたかという思いで聞いていたサダさんではありましたが、夫が「すべて俺が悪かった」と言って頭を深く下げる姿を目にした時、今度は自分が女房として歩んできた姿を思い返し、急に恥ずかしい思いが込み上げてきました。「決して夫が言うような従順で良い女房ではなかった。その時その時精一杯の抵抗をしてきた自分でしかなかったではないか」と、今度はサダさんが手をついて謝ったといえます。

こうして老夫婦が一晩詫びを言いながら泣き明かしました。それからの萬寿男さんは亡くなる一週間ほどの間、お粥やおもゆを運んでくるサダさんに「すまないなあ、有難いなあ」と両手を合わせて過ごし、まるで仏様のような感じだということ、枕経に赴いた私にサダさんが涙ながらに語ってくれました。私が「それなら、これまでいろいろあったけど、おばあちゃんは幸せだったんだよね」と言いますと、「はい、今なら幸せだといえます」と答えておられました。

萬寿男さんは、報恩講ともなればきちんと服装を改め最前列で聴聞されておりました。特に仏語を連ねてご安心を語るという人ではありませんでしたが、本願の教えに照らされ、我が身のいたらなさ、申し訳なさに深く領いておられたのは確かでありました。これこそ「如来、我となりて、我を救いたもう」はたらきに出遇えた姿ではないでしょうか。